

文語日誌（平成二十六年九月二十二日）

八月十四日、澁谷の東急東横店古書市の初日に赴く。かつては夏休み期間に新宿の京王、小田急、伊勢丹そして横濱そごうと百貨店の古書市を廻るは小生にとりて無上の愉しみなりき。されど近年開催店舗の激減したるは悲しき心地ぞする。今もなほ開催を續くる東横店の健闘ぶりには敬意を拂ひたし。

午前十時の開店とともに、エレベーターにて八階催物會場を目指せば、雪崩を打ちたる如くに直行する人々の姿あり。プロの古本屋と覺しき人々の眞劍なる眼差しも感ず。張りつめたる空氣感は格別にして清々しさすら覺ゆ。瞬く間に満員状態となる。展示物、年を経るごとに明治・大正期書籍の占むる割合、減少傾向にあるは否めず。明治・大正は遠くなりけり。佛蘭西哲學者森有正著の「パスカル」（昭和十七年の創元社版）、矢内原伊作氏あて著者直筆獻呈辭入りのものを手に取りて棚に戻せば、忽ちに賣り切れたり。

今回の收穫は以下の通り。

(一)『The Art of English Conversation』芝染太郎著（丸善、大正七年刊）

先づ目に留まりたるは、赤き袖珍圖書にて金文字の筆記體英語美しき印字の一冊なり。「英語の達人」の祕傳を傳授するが如き印象あり。芝染太郎氏（一八七〇年生、一九四九年没）は昭和初期にジャパン・タイムズ社長。日本ロータリークラブ専任幹事など務め、戦艦三笠の保存に盡力したる人物として知らる。

(二)「明治名文集」佐藤吉次編（大日本圖書、明治三十六年刊）

佐藤吉次氏の出自は不明なるも、國語教育關係者と覺ゆ。本書のなりたちは「はしがき」によらば以下の通り。

『この集にえり編みたる文章はいづれも斯の道に於いて世に覺え高き諸先生等のものしたる文のみなれば、文法はた語格なんどの正しきは今更いふまでもなく、その文どもの調べ高く雅やかなることもまた自ら傳はりていと品高くめでたき文になんある。

かかればおのれ早うこの雅文を斯の道に志ある者の爲にと折にふれて一つ二つづつかれこれの雑誌はた書の中よりえりおきたるがやがて此度の集とはなりたり』

本書に掲げられたる綺羅星の如き名文の中より、ここにては、井上毅氏（一八四四年生、一八九五年没）の岩倉具視公（一八二五年生、一八八三年没）に關する文を紹介せむ。

月日の小車はめぐりめぐりて流れる水より早く故右府公の世を去りたまひしより、今ははや十年あまりをぞ過ぎぬる。大詔のまにまに我が國を不二がねの安きに置かてやほと、思ひ入りたまへる公の一すぢの誠心は、天地の間にみちわたりて、きはみなき後の世まで、語り継ぎ聞き継ぐべければ、今更に謂ふまでもなきことながら、公の逸事の一二を思ひ出すままに書き記して、世の鑑ともなし史人の料ともなきなむ。維新の初めに神武の古に復るといへる大事を定められしは、この公の輔翼の力にぞよる。以下略』

同時代人のみるところの岩倉公の印象活寫せられ、深き思ひの傳はる良き文章なりと存ずる次第なり。本書は國會圖書館の近代デジタルライブラリーにも収録無ければ、稀少價值あり。

(三)「道歌物語」鈴木魅著(忠誠堂、大正十三年初版、昭和二年十一版)

函入。荏原郡碑衾町八雲小學校長印及び「記念」のスタンプあり。何らかの記念行事の折に生徒に配布せられしものならむ。八雲小學校は偶々小生の母校(目黒區最古の小學校)なれば不思議なる因縁も感ぜざるを得ず。冒頭の題字はかの澁澤榮一氏の筆になり、「導之以徳、齊之以禮」とあるは論語よりの引用なり。前東部逓信局長の序文によるに、吏員傭人向け「通信講話」の連載記事を纏めたる由。ここに道歌の一例を擧ぐ。「うつるとは月も思はず うつすとは水も思はず 廣澤の池」。歌の心は明鏡止水、虚心平氣との解説あり。なほ、この道歌、實は新渡戸稻造氏の著作に頻出し、氏の最も愛したる道歌の一なりき。

(四)「美文韻文 花紅葉」大町桂月、武島羽衣、鹽井雨江共著(博文館、明治二十九年初版、明治四十三年刊)

愛らしき詞華集にて文庫サイズなるも嬉し。愛讀せられたる形跡のある古書なり。共著者の三者いづれも東大國文科の卒、桂月の名文、羽衣は東京音樂學校教授を務めて、「美しき天然」、瀧廉太郎作曲「花」の作詞家、雨江はスコット「湖上の美人」の譯者として知らる。

(五)「謠曲物語」和田萬吉著(大正十二年初版、昭和二十四年刊)

和田萬吉氏は東京帝大圖書館長、教授を歴任。有名なる謠曲の粗筋の分かるハンドブックなれば、非常に便利。先日の文語百撰講義にて市川浩先生の謠はれし「礎」も収録せらる。本書いまだに現役版書籍(九千八百圓)も存在し、息長き不朽の名著とこそいふべけれ。